

公益財団法人日米医学医療交流財団 アメリカ短期看護研修助成

研修報告書 (2016年度 助成者)

作成日 2016年11月1日

氏名 (フリガナ)	牧野 はるか (マキノ ハルカ)
研修地	アメリカ・オレゴン州ポートランド市
研修期間	2016年10月9日(日)～ 10月15日(土)
所属機関名 身分	静岡県静岡市立清水病院 看護師

今回このような素晴らしい研修に参加することができ、感謝いたします。私は産婦人科に勤務して5年目となりますが、今後の自分の看護の方向性についてどのような道を選択すればよいのか悩んでいました。そんな時に、自分の勤める病院で海外研修の募集があり、これは自分の看護の方向性を考えるチャンスになるのではないかと思い、応募を決めました。全国各地から集まった方々と研修に参加すること、また海外という地に不安も大きかったですが、出発時にはトラベルパートナーの方々をはじめ、公益財団法人日米医学医療交流財団の方が見送りにきてくださり、緊張がほぐれ、笑顔で出発できたことを覚えています。

今回アメリカのポートランドに海外研修に行き、アメリカの看護師の意識の高さに非常に驚きました。アメリカでは看護師免許を2年毎に更新しなければなりません。また、ナースプラクティショナー制度があり、専門性の高い知識・技術を習得できるシステムがあります。この資格を取得すれば看護師でも診断や処方などを行えます。殆どの看護師がナースプラクティショナーの資格を取得するそうです。就職する際は病棟と契約するため、日本の様に複数の部署を異動するのではなく、1つの部署に滞在して働くことができます。そのため、より専門性の高い知識や技術を日々の業務を通して習得しています。また、アメリカの看護師は全てデータを基に日々の看護を評価しているそうです。内容としては、転倒転落がどのようにしたら改善できたか、院内感染の割合がどのような対策で減少したかというものを、日々データにして残しておき、まとめることで日々の看護を振り返っていました。そのまとめたデータと結果はどこの病院でも、患者さんにわかるように廊下に提示してありました。

研修先のポートランドは世界で唯一尊厳死が認められている地です。尊厳死について学ぶと共に、死についてもゆっくり考える機会になりました。講師の方が関わった患者さんの事例で、前立腺癌で長期放射線療法を行い、強い嘔気が出現しホスピスが導入されましたが、初めて会った際に「苦しくて苦しくてもう死にたい。この吐き気が良くなると自分の頭を銃で撃って死ぬ」と言われたそうです。もし自分が初めて会った患者さんにこのようなことを言われたらどうしますか？と問われた際、私はどう答えてよいかわかりませんでした。講師の方からは、死と接する患者さんは本当に深く深く真剣に死ぬことを悩んでいることを誰かに聞いて欲しいという思いを抱いているため、終末期の患者さんの話をしっかりと傾聴し、受け止めることが大切だとおっしゃっていました。その受け止め方も、きちんとそのまま平らな心で受け止めなければなりません。そのためにも、自分自身の事をよく知ることが大切だと学びました。私の病棟では終末期の患者さんが少ないため、死についてきちんと考えたことがなかったと思いました。自分自身を知り、終末期で苦しむ患者さんの思いや苦しみを、なんの偏見もなく平らな心で受け止めるよう努めたいと思いました。また、アメリカでは終末期になってから緩和ケアを導入するのではなく、病気の診断を受けた時点から緩和ケアが導入されると聞き、日本と大きく異なる点だと思いました。自分の勤める病棟でも、癌患者さんが多く入院しているため、癌と診断された後から自分が今後どのような治療を行い、どのように生きていきたいかなどと患者さん自身の思いを尊重し、その人らしい人生を送れるよう緩和ケアを導入していきたいと思いました。

今回の研修に参加した方々は殆どが私よりも経験年数や知識・技術も豊富であり、ともに研修を受ける中で仲間からも多くの刺激を受けました。今回の研修を通し、非常に貴重な体験ができ、多くの学びを得られました。私たちが安全で円滑に研修が行えるよう調整して下さったスタッフの方々に心から感謝致します。研修で得た学びを今後の看護に活かしていきたいです。